



新

講

話

行

友

李

風

作

修羅八荒

(四〇)

に結句の方が氣象なしに暢
語が床じへ腰をおろしてから、
聞も無い事ありました。
これも同じく原の方から、演
華の前を通り過ぎて茶店の前に
足を停めた三人づれの男。「お懸けないまし御服な
いまし」「盛んに掛けられる、先に立った
一人が、次の男を何やらさやか
合ひ」「ア、奥が目隠しになつてを
ります、どうぞ此方へ……」説はれるよ、皆空の紙解く解く
解く、數つ興の床几へ陣取る。先の男といふのは、年のころ五
十格好、肥て娘の顔、身に結構
城萬勝の着物に、袖の牛合羽、袖
の掛、太道中刀、餘裕あ
け目なし、魔揚振つた旅姿。次の方は三十五六、いさか涼
味な顔立ち、木綿縫の着物に
小倉の帯、眞田織の上三尺、廻し
合羽の兩袖、冬届けねあて、腰
にはほの詰ちた旅物の外に、素
銅の矢立が光つてゐる。会話の如
れぬ扱ひですが、先づ男對する
召使か、もしくは旅ひ人らしい取
り……。

「かしこりよした」

乙女が例の花瓶を持つ
月やく「心付下ニヨリ薄き
福送聖母天子をすすめ

アーチー・モード・スリーブ

アーチー・モード・スリ